

広島県立美術館

研究紀要

第13号

- 『改正香道秘伝』(下巻)の翻刻(その二) …………… 石橋 健太郎 1
- 資料紹介：南薫造「1909年日記」と「滞欧期ノート」 …………… 藤崎 綾 30(15)
- 中央アジア・トルクメン人エルサリ族のジュドゥルについて …………… 福田 浩子 44(1)
- 広島県立美術館所蔵刺繍袋コレクションに見るアーモンド(バダム)文様—

2010

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.13

- On *Judur* of Ersari Turkmen, Central Asia: the almond (*badam*) pattern (1) 44
from the embroidery bag collection of Hiroshima Prefectural Art Museum, Hiroshima Japan
FUKUDA SIDDIQI, Hiroko
- A Study abroad diary and related materials of Minami Kunzo (15) 30
FUJISAKI, Aya
- A Reprinting of the mysteries book of the incense ceremony Vol.2-Part2 1
“Kohdohhidensho-Kousei-Makinoge”
ISHIBASHI, Kentaro

2010

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

『改正香道秘伝』（下巻）の翻刻（その二）

石橋健太郎

はじめに

「広島県立美術館 研究紀要第7号」において、当該の「香道秘伝書校正」上下二巻のうち、上巻の翻刻を行った。また「広島県立美術館 研究紀要第9号」において、紙面の都合上、下巻の前半を翻刻した。したがって本稿では、下巻の残り後半を翻刻する。

本稿では成し得ないが、今後「改正香道秘伝」の内容を、他の香道書のそれと比較検討することにより、香道の成立過程を一部なりとも明らかにして行きたい。

上巻には、「雪月下集」、「志野宗信記」、「香合式」、「宗温六十一種香名」の四書を取載する。下巻には「炭翁齋香炉之図」、「武部隆勝香之筆記」、「十組香之記」、「香之記」の四書を取載する。本稿では、「十組香之記」、「香之記」を翻刻する。

尚、当該資料の装丁は、当初のもののように見受けられる。

十組香之記、

十炷香之記、

ウ三三一一二二二三一

（名乗）

- 梅花 一 二 二 三 一 三 三 二 一 七
- 緑竹 一 二 一 三 三 二 一 三 一 五
- 芙蓉 一 二 三 一 一 二 二 二 七
- 芦葉 一 二 二 三 三 二 三 十
- 芭蕉 一 一 二 一 三 二 一 四
- 札十二枚にて聞候、十炷香也、香の包やう、常のごとし、三色を三包つ、九包、又別の香を二色客とするなり、札十二枚ハ、一の札三つ、二の札三つ、三の札三つ、客の札三つ

なり、火本より香をつぎ出し候を、右の手にてとり、左の手にすへ、右の手をおほいて聞なり、香炉を畳の上に置いて、

次の人にハたし候時、火本より札筒を出し申候、一の札を入、次之人の前にをくなり、何も一の札を入れて、次へまはず也、二番の香、出候時、初の匂ひと同じ物と聞候

時ハ、又一の札を入候也、三番の時一番に出たる香と聞候時ハ、又一の札を入候也、二番に出たる香と聞候時ハ、二の札を入候也、一にても、二にてもなきと聞候時ハ、三の札

を入候也、何も匂ひ、よく聞覚へ、一の札入たる香と聞候時ハ、何時も一の札を入、三の札入たる香とおもひ候時ハ、三の札を入候なり、四番の時、一にても二にても三にてもなき

とおもひ候時ハ、客の札を入候也、一番に出たる香かさねて不出時ハ、聞おさめ候まで、一の札を一枚残し置也、則一番の香、客也、是を初客と申也、一の札にても二の札にても、三の

札にても、又客の札にても、類なきと思ひ候を、二枚残すなり、是客なり十番に客出

候をハ、すて客と云なり、客に点かくる事、一客ハ、点四つ、二から八点二なり、札入候次第ハ、一、二、三、客と、次第するなり、

点のかけやう、前後むすびたるを、あたりとするなり、図に詳也、

座中の札を一枚つ、札筒に入、火本に渡し申時、一を一の折居に移し、二を二共折居にうつす終まで、同様也、十炷終り候て、一の折居よりひらき、次第く、札

のごとく記録紙に書のする也、香包の紙を、一度く、御し串にさし、十包を皆さし候て、包紙まきれざるやうに、御し串と共にぬき、上を下へたてなをし、一つ、とりて、包紙を開き、記録紙に書付也、

銀葉十枚に、度、の香のかへしをのせ、次第をたがへす、銀盤にならべ置也、記録紙に点と書時ハ、両点数に入、聞と付

る時は、両点も一つになる也、

下に聞の数を書時、貴人には、三炷五炷

と炷の字をかく也、平人にハ、たゞ三五と書也、

札の絵をかしらに、二字づゝに書て、名乗

をかたに付る也、貴人の御名字をハ一字

程あげて書也、札にて聞候香ハ、皆同じ、

はじめより、無を可聞と名乗たるには、数

の所に無の一字を書也、若あたりたる

あれバ、点をかくる也、是あたらざる也、名

乗ずして、無になりたるをハ、不書に置

なり、其座の一奥に無太郎と記し

たる事もありしと也。

○ 花月香之記

月一花二月三月二花二花一客(追加)

(花方名乗)

梅花 月一花二月三月二花三花一客

緑竹 花一月二花三月三月一花一客

芙蓉 月二花二月一月三花三花一客

花方点八

特 一星 九点

(月方名乗)

芭葉 月二月三花二花三月一花一客

芭蕉 花三月一月三花一月二花一花二

青松 花一月二花二月一月三月二花三月二

月方星九 月方負了

花月共に星ばかりの時ハ、多少を論

せず、持とするなり、

花月香の事、香六色を二宛十二包なり、

六包にハ、花二花二花三月一月二月三と、

香包のうへに書付て、此六包を試に出し候、

残六包ハ、包紙のうちに、花二花二花三月、

一月二月三と書也、かきまぜて傍にをき、

さて試の香を出し候時、是ハ花二花二是ハ、

花三、是ハ月一、是ハ月二、是ハ月三、と火本

より名乗候て、出し候也、但香炉ニツ、火本二

つなり、花方左三居、花方より三炷出し

後、月方より出すなり、試過て六包の内、何

れにても一包取て、花方より出し申時、右の

試の香に思合せ、花の一と思候へハ、花の

四星 五星 特

一の札を入候、又月一と思ひ候へハ、月一の札を入候也、残る札も同し、又客を入候ても聞候なり、追加を可聞と思候時ハ、客をバ不入候也、追加の事、香終候て、右六炷の香を本のごとく包、又其外のかわりたる香を客の包紙につゝみて、六炷のなかへまぜ候也、何れ成とも取て、火本よりつぎ出し申候時、六炷のうちと聞候時、月にてても花にても、思ひより候札を入候也、六炷の外と聞候時ハ、客の札を入候なり、

追加の時、点の事、花月の香出たる時、当り八点三つ、星ハ常のごとし、花月を客と聞たる時ハ、一人なれば星七ツ、利を得ために、出したる故也、二人なれば星五ツ、三人以下星三つ宛也、客の時当り一人なれば点五ツ、三人以下点三ツ宛なり、客を花月と聞たる時ハ、星三ツ也、

○宇治山香の記、

しかそすむ

わかいほは 名乗

都のたつみ 名乗

しかそすむ 名乗

世をうち山と 名乗

人ハいふなり 名乗

宇治山香之事、香五色を十にて五

包にハ上に銘を書、五包にハかくして中に

書なり、五包の試を出し候時、書付のごと

く、是は我庵、是ハ都のたつみ、是ハしか

ぞすむ、是ハ世をうち山と、是ハ人ハいふ

なりと、五包ながら名乗て、出し候也、さて試過

て五包の香のうち、何れなりとも、一炷つぎ

出し候時、我庵ハ、となりとも、都のたつみと

なりとも、心次第に札紙のおくに書付、上

に我名乗を書て出し硯箱のふたに入

置也、面、札紙そろひて後、札紙を開き

記録紙にうつし、其後かの一包をひら

き、其一句を記録紙のはしに書付、当り

たるに、点をかけ候也、所望なれば又一炷

聞候事も有なり、

○小鳥香之記、

一二三三四

も、ちとり 名乗

ほと、きす 同

いした、き 同

あをしと、 同

きせきれい 同

くろつくみ 同

ひとめとり 同

あさりとり 同

かしらたか 同

かハらひは 同

よふことり 同

小鳥香ハ試なし、香五色を二つ宛、十

包にして、一二三四五一二三四五と対し、

置なり、包紙十炷香に同じ、さて二つ

にわけ置何れなりとも、一包取かへ、五

包をませ合せ出し申候時、譬バ一二三四

と出候と、おもひ候時ハ、も、ちどりと云名

乗を札紙に書付候、一二三四三と出候と

思ひ候時ハ、あさりどりと書付候也、一二三

三四と出申候と思ひ候時ハ、いした、きと

書付候也、餘皆同じ座中の札紙、そろ

ひ候て、一、記録紙に写し、さて香包

を開き当りに点をかけるなり、

○郭公香之記、

一 名乗 二 名乗 三 名乗

四 名乗 五 名乗 但四五一般

一 名乗

二 名乗

三 名乗

四 五同前 名乗

五 名乗

郭公香ハ、めんくおのれが聞覚えたるを、

一切つゝみ、包紙の上に、我名を書付出し申候、

火本請取、香のたけ幅、同じ様にそろへ、

同じ色に染て、包かへおくに、それくの名

乗を書付るなり、聞納候て、何番目の香、

我香と思ひ候時、札紙のうち、一となり

共、二となりとも、心次第に書付、上に名乗

を書出し申候、さて札紙を開き記録紙に

一たれ、二誰と書のせ、其後面々の包紙

をひらき、記録紙の端に、書のせ当り

に点をかけ、あたらずるに星をいたし候也、

自然兩人、同じ香を出事有、其時ハ、

はじめに出たるを、先記して、後に出たる

を同前候と書也、譬バ、一三同じ香の

時、札紙にも一三同全候と書なり、いく

たり有ても、書様同じ、聞あてたる、殊

更手柄なり、

○小草香之記、

やうき、

やうき、 悉皆合点

き、やう

うやき、 合点一

やき、 同 一

うき、や 同 一

小草香ハ試あり、草の名の字数程、包

紙入候也、き、やうなれば、四包のうち二包

ハ同香、残二包ハ別の香也、あさがほなれば、

四包ながら、別の香也、き、やうなれば、一

二の香を、きの香と名付、三番目の香

をやの香と名付、四番の香をうの香と

名付候て、試出し候、試過候て、右四色の香

をませ合、何れなりとも取て、香炉に置

出し申候、四炷ともに聞候て、始二炷ツッキ

て、後二炷かわりたると聞候へバ、き、やう

となりとも、き、うやとなりとも書也、又

はしめ二炷かハりて、後二炷続きたると

聞候へバ、やうき、と成とも、うやき、と成

とも書餘、皆同じ、札紙、何れも記録紙

に写し、其後包紙を開き、当りを穿

鑿して、あたりたる数程、点をかくる也、草

の名数、心次第也、四炷なれば、き、やう、な

しこ、あさがほなど、字数の四つ有物を

用也、五炷なれば、ふぢはかま、しやくやくな

どの類也、三炷なれば、すみれ、き、くな

どのたぐひなり、

○系図香之記、

III

III 名乗 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

III 同 III 同

系図香ハ、香四色を十六に包也、各四

炷宛也、十六包をよくませ合せ、其中

より、何れ成とも、四包取候て、常のごとく、

火本より出し候、譬バ、一 二 三 四 皆かハリ

たる間候時ハ、札紙に III 如、此図をつくり

て、出すなり、又一 二 同香にて、三 四 かハリた

ると間候へバ、III 如、此図を作る也、餘皆同し、

香終候て、札紙を開き、誰ハ何と図を作

書付、包紙を開き候て、記録紙の端に書

付のせ、点をかくる也、正傍の穿鑿むつかし

き事也、図にくハしく見えたり、つよき

当りを正とし、弱き当りを傍とする也、

五炷六炷九炷まで有なり、香ハ定まり

て四色に過ず、端に源氏香と書付時ハ、

巻の名を図の下にも、札紙にもしるす也、

十炷香焼合之記

一 三 一 二 一

二 三 一 二 三

青松 一 三 二 一 二

三 三 一 二 二

緑竹 三 一 二 一 二

ウ 一 三 三 二 二

萩花 一 三 一 一 二

三 一 三 二 一

四

四

梅花 一 三 一 二 一
 二 三 一 二 三 十

十炷香焼合ハ、常のごとく、一二三と試を

いたして、さて十包をませ合せ、二包取て、

銀上に二炷ならべ置也、香の置所灰共

こしらへやう口伝有、よく聞定め試に思

ひ合せ二の香と思ひ候時ハ、一の札と

二の札と二枚、札筒に入候也、餘皆同じ

試の外、まじりたると聞候時ハ、一かに二か

三かに、客の札を添候也、

源平香之記、

一 三 三 一 一 二 二 三 三 二

源氏方共四點勝、

梅花 一 二 二 一 一 三 三 三 一 二 六

青松 一 一 一 二 二 二 三 三 二 四

萩花 二 三 三 二 二 三 三 三 一 四

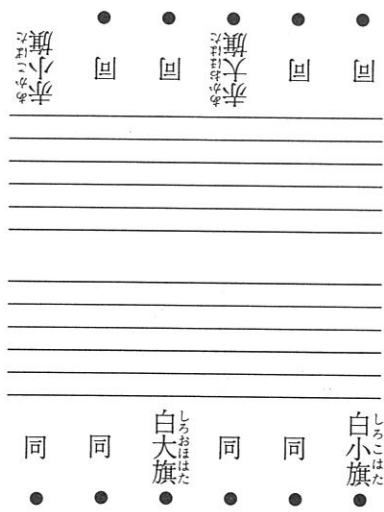
芭蕉 一 三 三 一 一 二 二 三 一 十

平氏方十八點負

芙蓉 一 三 三 一 二 二 三 二 八
 撫子 一 一 二 二 三 三 二 一
 芦葉 一 一 二 二 二 三 三 三
 緑竹 一 二 三 一 一 二 二 六

源平香之香盤、

源氏



流芳按ずるに、此源平香盤の図古

本の通、今ここにうつす、しかれども、此図

初心の理解がたきによりて、左に

近世用る所の盤立物の図をくわし

く著す、見合せ考しるべし、

源平香の事、試の十炷香に同し、但一炷開

なり、以前にうちそこなひて、手に札なき

と思ひ候時は、たたず、所を明て置也、一炷宛

開て当りたる時ハ、旗を一間さきへす、むる

なり、客ハ二間、一客四間也、自他行向て、

双方あたりたる時ハ、旗を置かゆる也、中落を

へだて、双方あたりたる時ハ、中落にならべ

置也、一方あたりたる時ハ、あたらざる方を、

一間退加して其後へす、むる也、源氏ハ

白旗、平家ハ赤旗也、両方の大旗を中

に立て、面々の小旗を我々の前に置也、

図にくハし旗の紋ハ、香の札に同じ、

鳥合香之記、

う う

よぶこどり

う

う

も、ちどり

よぶこどり
も、ちどり

う う

も、ちどり
う

鳥合香事、香三色を六包にして、三包

にハ、も、ちどり、よぶこどり、いなおふせどりと、

名をあらハして書付、試に出す也、三包にハ、

うちに書て、名をあらハさず、此外別の香

二色を二包にして、うの香と名付、右の

三包とひとつにかきませ、五包のうちを、

いづれにても二包取て、一包宛火本より

焼て出す也、試の香に、聞合せ札紙に、是、

と二の色を書付て出す也、図に委し、

右の十組の香ハ、御家の組香の次第なり、

志野家も、是に随ふ、今源平香之盤立物

の図、初心意得がたきを以て、委く図を改

左に増補し侍る、大枝流芳記、

省享保甲寅年正月

十組香之記考正

十種香の中、**三の札**、古板二の札とあるを、

今三の字に改之、

花月香の記録、古板之書、星点ともに

誤多し、今改之、**火本二ツ**、一本作二、二人

宇治山香之記録之中、都のたつみの下、

名乗の二字を脱す、今補之、

小鳥香記録、古板、次第あしく、今此刻改

正之、又**かつらひ**は、今かハラひはに改む、

郭公香之記録の中、三の字の下、名

乗二字脱、今補之、又四字下(又同前の三字重複す

るもの一ツ削之)

小草香之記、聞人の名上にあるべし、

今ここに断て、不補之、**云余**今書餘に

改む、

系図香の中、古板の書記録書やう、

あしく、今改之、

十六此下、**つ、み**の三字脱、以**異本**、今補之、

余皆、余字今改**餘字**、

あたりと傍をする也、今以**異本**あたりを

傍とするなりに改む、

十柱香焼合之記の中、青松之下、**四**の

字を脱す、今補之、

源平香之記の中、出香の次に**源氏**

方二十四点勝、此八字脱す、今本書補

之、又秋花の下、古板**三**之字、一字つ

下る、今改之、又芭蕉の次に**平氏方**

十八点負此七字脱す、今補之、

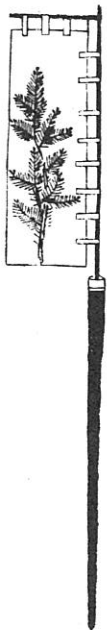
源平香盤の**図**、本書、古板之通、其儘

しるす、今ここに立物盤の**図**、初心のみ

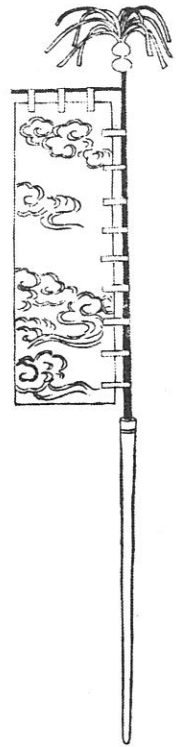
わけやすからんかため改め、うつし侍る、

源平香立物之**図**、

小旗**十本**、**白五本**、**赤五本**、



大旗二本、赤白、



右の通に作り、平家ハ赤色、源氏は白色、

札の紋を絵に書、又ハ縫にすべし、大将旗

ハ、白地赤字の金欄にて、両面合に作るべし、

旗竿ハ、金物柄ハ焉木、紫檀の類をも

ちゆべし、

盤も、今ハ名所香とかね用ゆるにより、

界一ツの中に、穴二つあり、源平香のみに

用るハ界一つに、穴一つたるべし、勝負の

場には、二つたるべし、なを図のごとし、

源平香盤之図

(豎五行横十目中に、分

取場あり)

(豎一尺二寸五分横九寸足

見合分取一寸五分)

○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○

鳥合香之記録の聞鳥の名の上に連

中の名を書べし、本書これ脱すと云

ども、今こゝに断て補はず、

右十組香之事、委ハ奥の葉に辨す合

考べし、大枝流芳考正

香之記、

香次第、

一しうげんの時ハ

一うらみの時ハ

一はなみの時ハ

一ちぎりたきおもふ時ハ

十

卜

山

井

一人にとをく成時なりときハ

二

一ちやうぶくの時ときハ

二

一よろこびの時ときハ

キ

一うれしいの時ときハ

仁

一人を待かねたると思ふ時ときハ

丁

一おもへどもならずして、こゝろばかり

かよふときハ

工

灰のをし様之事ぐらひのしやうのじ、

一春ハ

一夏ハ
二

一秋ハ

一冬ハ
井

一真那斑ハまなばんはしかし、又黒し、

一真那賀まなかといふハ、わろし、

一東大寺とうだいじハなんども焼なり、

能次第なまじだい之香のかう

一東大寺とうだいじ、

二みよしの、三しやうかう、
一三吉野、一逍遙

一紅塵かうぢん、

五ほつげまやう、
一法花経

太子たいしハ東大寺とうだいじニ双程なるほどの香かう也、赤梅しやくばい檀たんとも云、

一志野殿しのどのハ鳥とりの羽はにて、香炉かうろハはく事ことな

し、小ゆびにてのごう也、

一先香炉まづかうろに火ひを入、灰はいをかきたて、せかいより

少すくたかくして、能よくなりをなをし、香箸かうばし

のかた〜ハ下に置おき、一つを筆ふでとることく

持もてなりを能よくなおし、香炉かうろハ順ゆんにめぐ

る様に、なりをなをし候也、扱さて小指こゆびにて拭ぬぐ、又

香箸かうばしを筆ふでとることくに持もち、聞香炉きかうろは、

五合ごかうにをす也、廉相れんそうなる灰はいハ、箸はし二づ、三方

からも付也、扱さて志野殿しのどのハ、箸はしにて中なかに穴あなを明あ

て、口くち平へいをふさぎ、銀ぎんをしかれ候、又穴あなを明あけ

にもよし、扱さて灰はいをおし始はじめる時ときハ、先まづ置前おきまへ

の足あしを、ひとさし指ゆびの先さきのそバに、はづる、

様やうにもち、其そのめぐらすハ、左ひだりの手斗てばかりにて

そろ〜とめぐらす也、

一置前おきまへの事こと、香炉かうろのもんなど有方あるかた能よく、又また

つくしき方かたをもちぬる也、

一人ひとりに渡候わたし時ときハ、置前おきまへを人ひとさし指ゆびの先さきのそ

バにはづして渡也、又下に置渡候も、能候、

請取うけとりらんハ、置前おきまへハ不入いらず、置前おきまへを定さだむる

ハ、初人はつひとに渡時わたしと、盆ぼんにすゆる時ときの事也、請取うけとり

様ハ何時も上よりにぎる也、

一銀ハむきあいの角を取、同すみを置前
に向てをくなり、

一伽羅の類ハ火つよき故に、いかにも細に

わる、其外ハ火よハき故に、そと多きに

わる也、小刀にて \square ぐ也、

一香ハ常にハ、た、う紙に入れて吉、畳紙の
寸法なし、

一太子などの様なる火弱香ハ、卒度大に

割なり、伽羅の類などの火強香ハ、少く

作なり、いづれにても、包ひ軽く薄き香ハ、

少大にして焼べし、尤小刀にてへぐなり、

一火とりにて、香聞事ハなし、若きかバふ

せこうのけべし、

一名物の香炉ならバ、木の箸にて、灰を

おこすこともあり、香炉にきすつままし

きたため也、

一香を聞に、左の指三つハ、香炉の底に

有如く、人さし指一つ、わきにはつる、様

に持なり。

一空焼の香の大きさ、扇の骨の大きさ也、

一夏ハ、香ハきかれぬ也、雨の朝、雪の夕など

には、必聞べし、夏ハ香のき、ちがう也、

一香炉の灰をおすハ、香を灰の上におとし

ても、とらんと云事也、灰をさねバ、灰の

中に香入て、見えぬ也、

一常の香炉ハ、灰を少すくなくする也、

一香をすぎてあぐるハ、指を少ぬらして取也、

一名香包む紙唐紙帑よし、鳥の子に包バ、

ちいさき香ハとぶ事あり、

一香袋ハ、底を指渡し、一寸八分の丸底

にする也、三色にすぎたるがよき也、緒つかり、

常のごとし、袋の高さハ、底に相応仕る様

にする也、

一香炉の火、始ハそときつく取て、真那斑

などの、わろき香を聞て、火あひよくなり

たる時、能香を聞也、始より、火あひをぬ

るくするハわろし、

一火あひは銀を置いて、銀の上に指をあて

そとをけバ、あつくて、指をひく程なる

が吉、それも指をあて、其儘ひかる、程

のハ、きつし、香をつがぬ先に聞て、顔にほん

のりと、火氣のあたる程なるがよし、

一新き香ハ、つぎハ、やがてはなはなとして、

火末かわる也、是ハ新き香と悪き香也、

一よき香ハ、初中後ともに同じ聞也、

一八重菊を、すみれと聞てもよしと、隆

勝被申し也。

一返しのある香ハ、伽羅斗也、十種の外

などハ、伽羅にてもかへしなし、

一中川、伽羅に有と云、真那斑本也、

一香はじめつぐ時、まなはんをつぎてよし、

らこくなどの類、つく事なし、可_二香聞_一時

ハ、灰を尖にする也、香焼時ハ、少ろくにする也、

一真那賀ハ、聞の早くうするが上、也、

たんとんの事、
並_二灰の事_一、

一きはだ焼粉にして、たらの木の中の、白み

を去やき、二種を等分に合、粉にして置

香炉に入、火をつくる也、

一香炉の灰に、池のひしのつると、葉を干て、

焼て用る、火久しくこたゆる也、

一香炉の灰に、大豆のからを焼、又いりぜう

になして用といふ、

一香炉の火に、たらの木を四つにわりて、

白みを去、あくにて煮て、鉄砲の薬の炭

のごとく焼、粉にして用と云、

一かざりに、香炉、香合置時ハ、香ばしは、

きやうじ、こじ立にかざる也、

一盆に香炉香合を置、香筋ハさきを

香炉香箱の間へ回如に置、又、二つの間

にすぐに置といふ事あり、焼て後有、

左の方より、香炉香箱の間へ置、又、始ハ

香筋ハ、手に持出るもよしといふ、

右之筆記、誰人の作たる事を知ず、終
に姓名を不_レ記、書中、又不番の事

多し、古板の本、下巻之始に入といへど

も、今下巻の終にうつす、委ハ凡例に

考をそのふ、

享保甲寅年正月

大枝流芳記、

香之記考正、

此記、誰人の作をしらず、別て、初の香次

第と云事、可疑論、凡例及附録に委

真那斑ハ八字の下は、字脱す、本書こ

れを補

口計 計ハ誘也、と字書にありて、みち

びくと訓ず、恐ハ斗の字ならんか、みち

びくにてハ、文義不通、依之本書改之、

良を 今以異本改銀

香炉の文 以異本、今本書、紋字に改、

方をする也 する、一本用るに作る、今本

書依之改正す、

小刀にてすく也 一本、へぐに作る、今本書

改之、

一太子などの様なる、火よハき香ハ、そと

大にわる也、伽羅などの火よハき香ハ、ち

いさくすく也、小刀にて、此文章、異本と

考合に、大同小異あり、尤古板のもの、文

章通しがたし、今本書、依異本改正

す、見合すべし、今爰に、古板の文章

をしるして、其改し趣をしらしむ、

火あひハ良、良字、本書改銀字、

初中後ともに同し聞也、此下に一本に

しるし、火末ハあるべしと云事あり、今爰

に著て、本書には不補、

たとん事、一本、たどんの事並に灰の

事、とあり、今、随之本書補之、

四つわりて、四つの下に字脱、本書今

補之、

きやうしこしに置也、異本にきやう

じ、こし立にかざる也に作る、今依之

本書改正す、

間へつ、此つ字、異本向の字に作る

今、文章不通により、依之、向字に本書をあらたむ、

大枝流芳校正、

香之記考正終、

香道秘伝校正下巻終、

(いしばしけんたろう／当館主任学芸員)

広島県立美術館 研究紀要 第13号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.13

発行日 2010年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22

2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444

印刷 株式会社 タカトープ rintメディア

〒730-0052 広島市中区千田町3丁目2-30

Tel. 082-244-1110